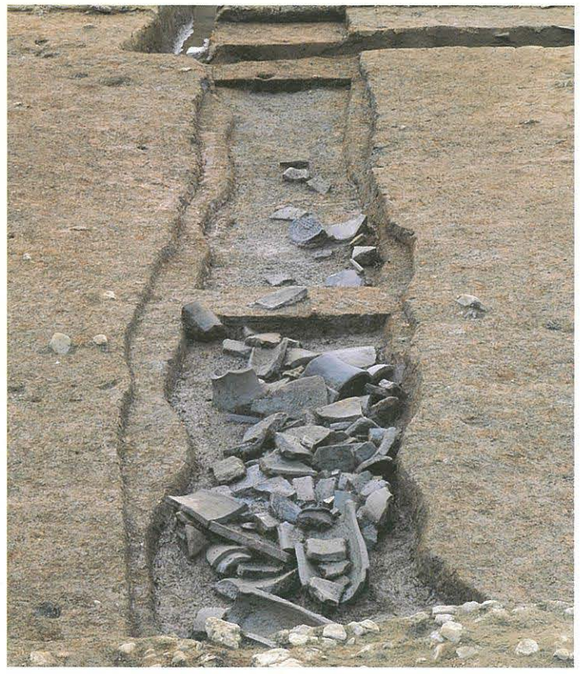
朱雀大路東側溝　宮造営に先行して幅約 16m の朱雀大路が造られていたことが分かっています。今回も調査区西寄りで幅 2.3m、深さ 0.5m の東側溝を検出しました。

運河　調査区中央を南北に貫流します。藤原宮を造営する資材を運んだ運河と考えられ、大極殿の北方や大極殿院南門の調査でも見つかっています。幅は約 4 mで、深さ約 2 mの大規模な溝です。今回は長さ約 7 m分を調査しています。

運河には灰色の砂が 0.8m 堆積し、砂混じりの青灰色粘質土が 1m 堆積しています。この上を黄灰色の土と茶灰色の粘土で埋め立てています。土器・瓦・木簡・木製品・漆の付着した布・動物骨などが出土しました。

斜行溝Ａ・Ｂ　今回の調査で初めて確認した溝です。調査区中央で北東方向へ続きます。2 時期の変遷があり、古い時期の斜行溝Ａは幅約 2.5 ～ 5m、深さ 0.6 ～ 1m で、運河に取り付いています。また、新しい時期の斜行溝Ｂは、運河や斜行溝Ａを埋め立てた後に掘られています。幅 1.8m、深さ 0.7 mです。この溝からは完形の軒丸瓦が出土しました。

南北溝２　南北溝 1 の西方にある素掘溝です。大極殿院南門付近の高まりを造った後に掘られています。南門を造営するときの排水溝と考えられます。埋められる際に、多数の瓦が廃棄されていました。



南北溝 3 の瓦出土状況（南から）

3．出土した遺物

瓦が多量に出土し、現時点で軒丸瓦が 65 点と軒平瓦が 54 点、鬼瓦片が 1 点あります。朝庭の周囲にある大極殿院や朝堂院に葺かれた型式のものが多数を占めます。宮造営時の破損品と宮廃絶後に廃棄されたものとがあります。

4．まとめ

礫敷広場を検出　礫の残存状況は良好で、1300 年前の姿をほぼそのまま示すものです。大極殿院南門の近辺は一段高く造成することや、通路状の施設が想定されること、暗渠を整備していたことなど、その詳細が明らかとなりました。

幡を立てた遺構を発見　藤原宮では初めての検出です。平城宮と長岡宮の例では、大極殿院南門の北に 7 基の宝幢（ほうどう）を支える柱を並べています。『続日本紀』には大宝元（701）年の元日朝賀に 7 本の宝幢を立てたという記事がありますが、それは平城宮と同じく大極殿院南門の北に立てていたのでしょう。今回発見した遺構は朝庭では初の検出で、唯一の事例です。これまでの知見とはまた異なった儀式の様子がうかがえます。

藤原宮の造営に関わる遺構を確認　藤原宮の造営資材を搬入するための運河を検出しました。過去の調査成果も合わせると、藤原宮内で総延長 500m 以上の運河が南北に貫いて掘られていたことが分かりました。また、今回の調査では新たに、この運河から分かれる斜行溝を検出しました。藤原宮の造営のために、運河網が整備され、計画的に資材の搬入が行われていたと考えられます。これらの遺構の変遷や、一時的な排水溝の検出により、藤原宮の造営工事の過程がより具体的に分かるようになりました。

今回の調査で出土した瓦

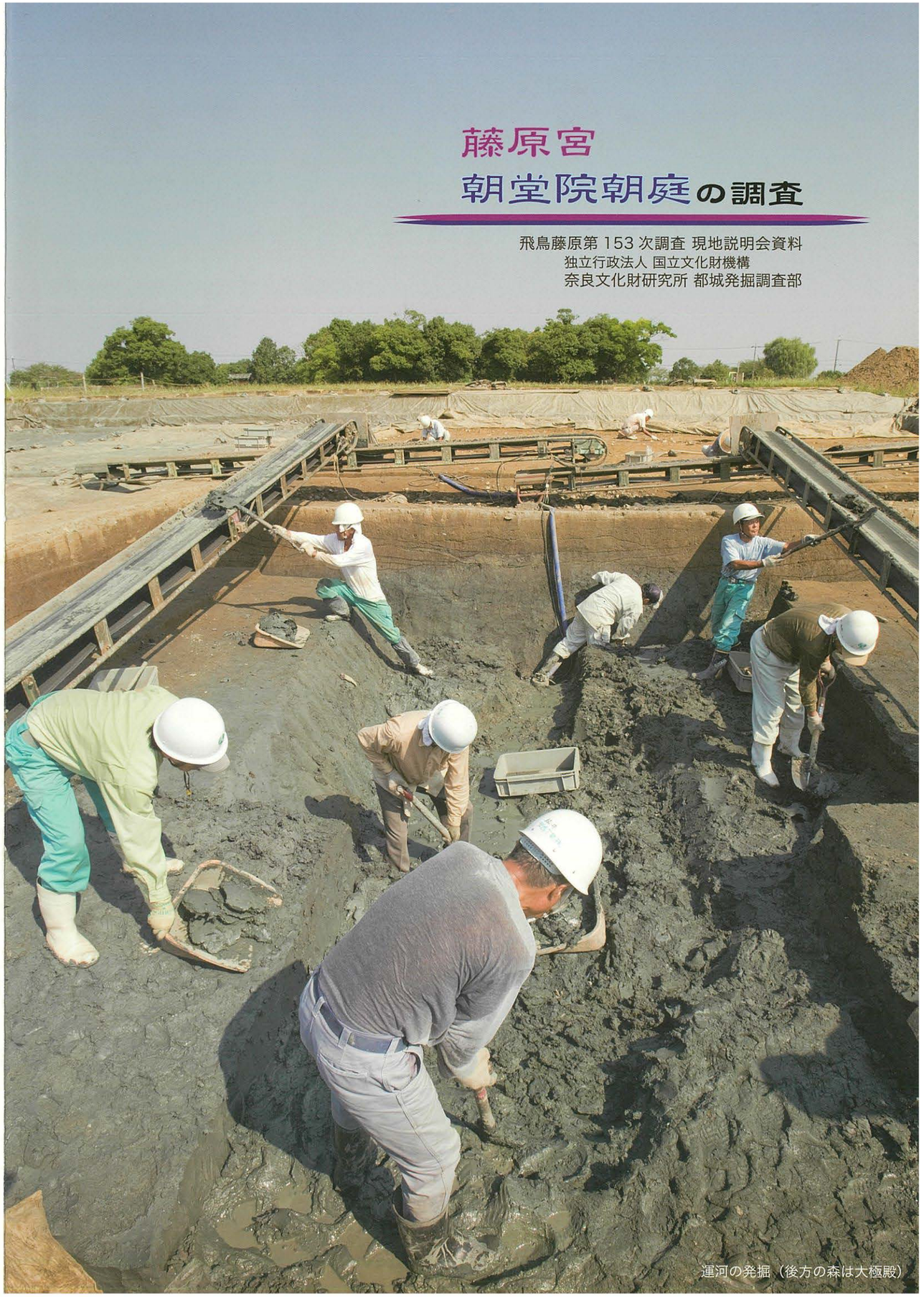
藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第 153 次調査現地説明会資料）
2008.9.27

独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘調査部
〒 634-0025　奈良県橿原市木之本町 94-1　http://www.nabunken.jp/

Edited by Y.Oda・T.Inoue・A.Okada

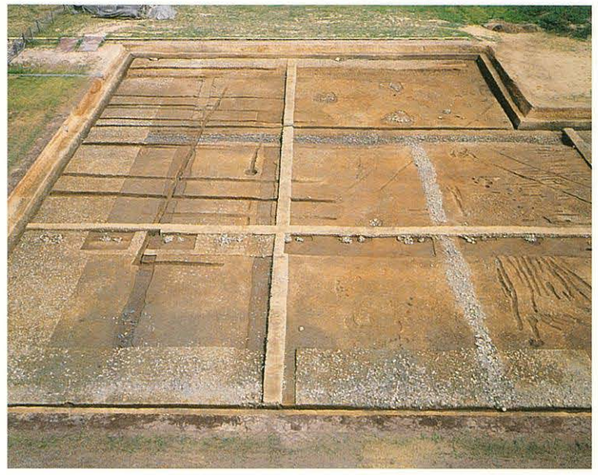
藤原宮
朝堂院朝庭の調査

飛鳥藤原第 153 次調査 現地説明会資料
独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所 都城発掘調査部

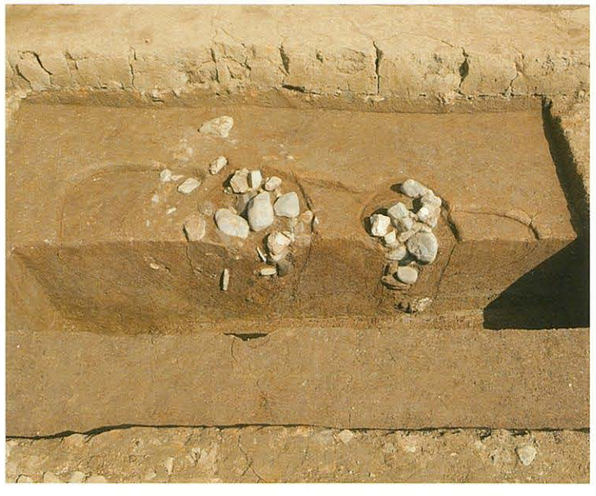


運河の発掘（後方の森は大極殿）

朝庭の礫敷
（大極殿院南門から望む）



柱穴列
（礫敷を取り除いた状況　中央の東西に並ぶのが柱穴列）



柱の抜き取り穴に礫の詰まった様子
（西から２番目の柱穴）

１．はじめに

今回の調査地は藤原宮の朝堂院の朝庭です。朝堂院とは、天皇の空間である大極殿院に対し、貴族や役人がさまざまな儀式や政治を行った場所です。その朝堂院の中央の広場が朝庭で、儀式の際には、役人がここに整列しました。

これまでの調査で、藤原宮の朝庭には礫を敷いて整地している状況が一部判明していましたが、本格的な発掘調査は今回が初めてとなります。また、昨年の大極殿院南門の調査（第148次調査）では、礫敷の下に藤原宮造営時の運河や柱穴があることが判明し、下層遺構の状況の解明が課題として残っていました。調査面積は約1650㎡で、2008年４月１日から開始し、現在継続中です。

２．発見した遺構

A　藤原宮期の遺構

礫敷広場、柱穴列、大型の柱穴、南北溝、礫を詰めた暗渠２条があります。

礫敷広場　調査区全面に広がります。北側の大極殿院南門付近は一段高く造成し、なだらかに上がります。

柱穴列　調査区中央部に、３m間隔で東西に並びます。８基見つかりましたが、宮の中軸線で折り返すと、全部で13基あると考えられます。大極殿院南門の南階段からは100尺（30ｍ）の位置にあり、東端の柱は大極殿院南門の基壇東端とほぼ一致します。横長の掘形に大小２つの柱抜取穴が東西に並ぶ構造で、礫敷の上から掘り込まれたために抜取穴に礫が詰まっています。柱の径は約30～40cmと推定され、間隔は心々で約60cmです。これらは柱穴の構造と配置からみて、儀式の際に幡を立てたものと考えられます。

大型の柱穴　大極殿院南門基壇のすぐ南方に３基の柱穴があります。いずれも一辺約1.6mの大きな方形の掘形で、柱は抜き取られています。柱穴列とは構造が違いますが、これも幡を立てた穴の可能性があります。

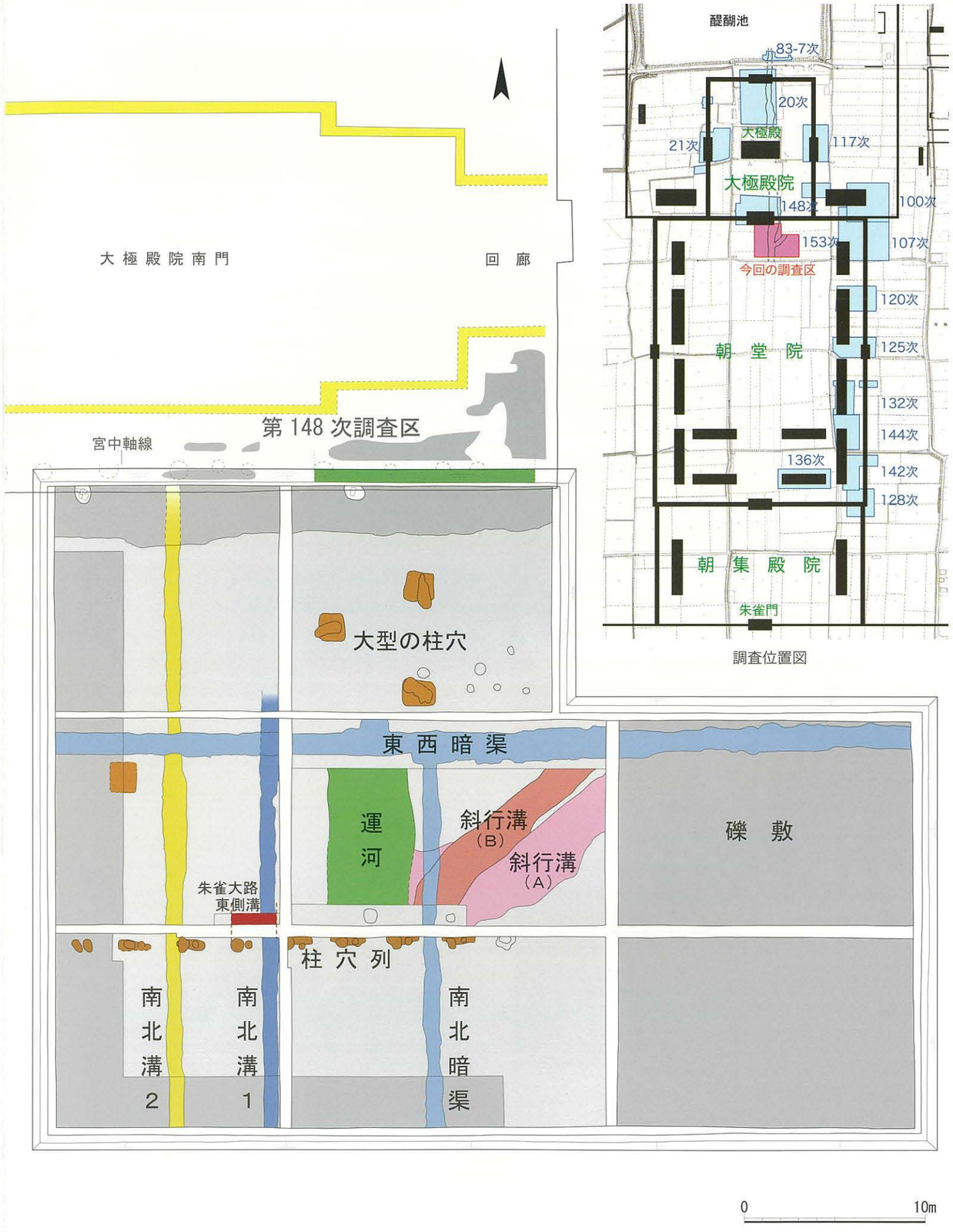
東西暗渠　調査区北寄りにある東西溝で、礫と瓦を詰め、その上に礫を敷きます。この周辺は礫敷広場で最も低く、水を集めて流す暗渠と考えられます。

南北暗渠　調査区中央で、南から東西暗渠まで延びます。幅約１ｍで、内部に大ぶりの礫を詰めており、周辺の水を集めて北に流す暗渠と考えられます。

南北溝１　浅い素掘溝を埋めて礫敷の溝としています。礫敷広場内に設けた通路状施設の側溝と考えられます。

B　藤原宮造営期の遺構

朱雀大路東側溝と運河、斜行溝、南北溝があります。これらの遺構は、全て礫敷の下で検出しました。



調査位置図

遺構平面図